

〈創作〉

齋宮暁白露

Princess Itsuki-no-miya's morning departure with tears

片山 剛¹

要旨

ここに公開するテキストは大阪市教育委員会と国立文楽劇場の浄瑠璃募集に応じたものの修正作である。原作は劇場の内部資料の形で活字化されているが、作曲、上演も行われていないので、事実上「お蔵入り」になっている。人形浄瑠璃はほとんど古典に依存しており、それは伝統芸能としては重要なことでもあるが、今後は新作も求められる時代が来ると思われる。それは次世代の観客に訴えとともに古典の価値を見直すきっかけにもなるからである。そこでその参考に資する可能性のあるものとしてここに旧作を公開する。

キーワード：創作浄瑠璃, 文楽, 文楽なにわ賞

Creative Joruri, Bunraku, Bunraku Naniwa Prize

はじめに

1991年から、大阪市教育委員会と国立文楽劇場は新作浄瑠璃の募集を始めた。募集要項によると、その趣旨は「昨今のニューメディア時代をむかえ人々の生活感覚や娯楽のあり方が、日ごとによりつつある現代社会において、文楽を生きた芸能として、次の世代へ継承することが課題となっています。(中略)新しい時代の進展に対するため、新鮮な感覚を盛った新作文楽の創作脚本を募集し、これを公演することにより、鑑賞の機会を提供し、文楽の振興に資するものとします」というものであった。

題材としては「古典の平明化を意図したもの」「子供向けのものとして、おとぎ話、伝説、童話等に取材したもの」「景事〈舞踊劇〉としては、市井の伝統的習俗等を取材したもの」を例として挙げている。分量は400字詰め原稿用紙60枚以内(景事〈舞踊劇〉の場合30枚以内)で、選考委員は石濱恒夫・玉田衛・富岡多恵子・難波利三・山田庄一・福岡康司(大阪市教育長)・島田治(特殊法人日本芸術文化振興会理事)の各氏であった。

筆者が応募したのは翌1992年10月締切の第2回の募集で、この回は22歳から90歳までの85名から88篇(2篇応募3人)の応募があった。入選は4作品で、優秀作に稲葉しず子氏『恋綱引(こいの

つなひき)』、佳作に北市屋安寛氏『秋津見恋之手鏡(あきづにみるこひのてかがみ)』、春海暢子氏『景事 二人長者(けいごと ふたりちょうじや)』、そして筆者の『齋宮暁白露(いつきのみやあけのしらつゆ)』であった。結局4作はすべて作曲上演されることはなかった。執筆者は、筆者はともかく、文楽に精通した人ばかりで、本格派の作品を作ろうとする傾向にあった。上演されたのは第1回の最優秀作¹⁾のみで、その作品も本来は本格的な時代物であったらしい。しかし、上演に際して子ども向けに改変されており、劇場はもともとそういう意図で募集をしていたのかもしれない。そこに応募者との間の意識の違いがあったのではないだろうか。

拙作は、原稿用紙60枚以内という指定に甘えてあれこれ盛り込もうとしたため、間延びする点が目立つ。そこで本稿ではあまりに拙劣な点は加筆削除することにした。

1 概要

この作品は天武天皇崩御後の政変に取材し、大伯皇女と大津皇子の姉弟愛、侍女村崎の誠実さを軸に創作したものである。当然、史実との食い違いや時代錯誤も辞さなかった。

新作浄瑠璃のあり方を、“伝統的な枠組の中に現

1 Takeshi KATAYAMA 千里金蘭大学 教養教育センター

受理日：2021年9月2日

代を描くこと”ととらえ、「人形劇の脚本」ではなく、古風な「院本」のイメージで書いた。そのため、歴史的仮名遣いで、七五調を原則として、引き歌も積極的に用いている。言葉や風俗は、バラつきはあるものの、およそ江戸時代後期を基本にした。一方、現代の社会問題を戯画化しつつ挿入したり、“忠孝”ではなく、“情愛”を主題に据えるなど、内容は現代に眼を注いだ。典拠としては『万葉集』の大伯、大津の和歌²⁾を用い、『伊勢物語』³⁾の趣向も借用した。

伊勢斎宮の大伯皇女は、許されぬ恋に悩み、病がちである。そこへ恋人梨原成麿の使者、横手黒人が訪れ、「この恋は終わった、二度と逢えない」という成麿の言葉を伝えた。わけを聞くと、大伯の実弟大津皇子が謀叛を企て、処刑されることになったからだという。実は、対立する草壁皇子側が、聡明で人望もある大津を目障りに思い、陥れたのである。

最愛の二人の男性を失うことになる大伯は、弟の命だけでも助けたいと、侍女村崎と相談して黒人にその方法を尋ねようとするが、黒人はかねてより大伯に横恋慕しており、簡単には教えてくれそうにない。そこで村崎は一計を案じ、茶を馳走しながら、大伯と密会させることを条件に依頼する。喜んだ黒人は「大津は、逮捕されたら即刻斬られて首だけが朝廷に届けられるはずだから、顔の似た者を身代わりにすればよい」と言う。それだけを言うと、黒人は宮の部屋に押し入ろうとするが、突然腹具合がおかしくなって、退散する。さきほどの茶には下剤が入っていたのである。

そこへ当の大津が逃げのびて来る。大津が我が身の運命を語り、別れを告げると、大伯は「自分が身がわりになるのであなたは身を隠して再起してほしい」と言う。この姉弟は面立ちがそっくりなのであった。しかしそれでは大伯の身代わりがない。二人がまた悩んでいると、奥から悲鳴が聞こえ、村崎が身に刃を突き立てている。子細を尋ねると、みずからが大伯の身代わりになると言う。二人の女性の思いやりに心うたれた大津は、三人分の命を預かって強く生きることを決意する。

まだ夜も明けやらぬ斎宮の館。一人はあてどもない旅に、一人は刃の待つ大和に、一人はあの世へと旅立つのであった。

2 本文

睦まじき夫婦を妹背と言ふならば、姉弟（あねおとうと）の仲らひも、それは妹（いも）なり背ならずや。まして隔つる雲ありて晴れずもあらば、子を思ふ親にもまして、かきくらす姉の心は真の闇。

東海道は十五国。その随一と神風の伊勢の浜荻、難波（なには）の葦。代々の帝の信仰篤き、天照大神（てんせうだいじん）の祀りどころ、内宮、外宮の西北（にしきた）に、斎（いつき）の宮とて館を設け、皇女一人（ひめみこいちにん）いかめしう精進潔斎そののちに、奉仕し給ふ定めなり。

天武の帝の御時、皇女あまたおはします、中にすぐれてうのはしう、心ばへさへ並びなき、大伯皇女（おほくのひめみこ）ときこゆるが卜定せられ給ひけり。帝崩御のそののちも、新帝即位の沙汰あるまで、しばし御役目延引と、日々の御奉仕まめやかに尽し給ふぞありがたき。

清めの雨も降り過ぎて、秋は名残の斎宮館（さいぐうやかた）。斎の宮のお側には、真心尽くす侍女村崎。鈴鹿といふは拗ね者で、三十七の厄崇り。田舎暮らしを気嫌ひの、胸に一物、油断もならず。あとは無邪気な若女房、童女、樋洗（ひすまし）、さまざまの女子（をなご）所帯の気安さに、今日も今日とて下女二人。掃除するやらしやべるやら。手は動かねど、口ばかり立て板に粒、雨後の水車。「マアマア、お福どん。アノよう効くことと言うたら、どうぢやいな」

「ナニ、お鹿どん。ようきく、テ、何がそれほど聞こえるのぢや」

「耳に聞こえるのぢやない。お薬がよう効くと言うてゐるのぢや」

「よう効くお薬、と言ふと、洞川の陀羅助か、越中富山の反魂丹。イヤイヤ、やつぱり娘がくれた和中散」

「そんなぢやないわいの。もつとよう効くお薬とは、斎の宮様かかりつけの御名医、丹波算庵（たんばのさんあん）様の御配剤。おつむのてつぺんから爪先まで、どこがどう痛からうと苦しからうと、モ、いつぺんに、さらりのサ、と治してしまふ。耆婆（ぎば）といふとも扁鵲（へんじやく）といへども、裸足になって飛んで逃げる代物。今日も宮様お悩みで、ただ今算庵様の御診察。きつとまた、よい妙薬を下されう」

「ホウ、そんなによ効くのなら、私の病も治してもらはう」

「フウ、お福どんはいかにも丈夫さうなが、どこぞ悪いところがござんすか。アア、ひとつ言うておくがナ、良薬は口に苦いだけでなく、懐（ふところ）にまで苦いぞや」

「なんの、それほどの妙薬なら、多少の金子（きんす）は融通する」

「ソリヤよい心掛け。それで、お福どんの病といふのは」

「知れたこと。若い女子の悩みと言へば、恋の病ぢやないかいナ」

と、言へば、お鹿は

「ホホホホホ。あたあほらしい。この小さなお館に、男というたら、門番の蠅男と蚊助、それに牛飼の蟬丸と蝶吉。あとは、小舎人の蝶姑男ぢやないか。蠅男は今年還暦で、蚊助は五十を七つも越えた。蟬丸と蝶吉は所帯持ちで子だくさん。蛾姑男に至っては十二になつたばかりで、まだにきびもできてはをらぬ。これでどうして恋患ひ」

「さればこそ、恋のできぬ病ぢやわい」

「なるほど、さうぢや」

と、かしまし娘。次から次に回る舌。止むる薬のあらばこそ。

医は仁術か、丹波算庵。腕はよけれど、強欲で、金がなければ病人を人とも思はぬ吝嗇稼業。親方日の丸齋の宮は、よい病人とまめなる奉仕。

見送る村崎、心は翳り、

「丹波様。御足労にてようお見舞。さて、宮様の御病状、お見立ていかがでござります」

と、問ふに、算庵、思案投げ首。

「ムウ、ここと申してお悪いところは見当たりませぬ。とすれば、これはやつぱり、お気の病でござりませう。医者のお見立ても有馬のお湯もこればかりは治せませぬ。つまるところ、そのお悩みの元の根をバツサリ断つのが最良薬。ところが、宮様も御気丈な。それがしには何もお話し下さらぬ。お側仕えのそこもとにお心当たりはござらぬか」

「ハイ、宮様は、恋」

「ナニ、恋」

「イエアノ、濃いお茶が飲みたいと」

「馬鹿な。そんなことではなうて、ソ、ソレソレ、胸の奥にじつと溜めてをらるるものがござらうが、ノ。ホホホホ、まあよろしからう。無駄な詮索、金にはならぬ。アア、イヤイヤ、何でもござらぬ。今は何より御無理をなさらず、養生第一心掛けられよ」

「結構なご診断、ありがたう存じます。それでは

今日はお薬の御処方はござりませぬか」

「とんでもない。気の病には薬が一番。それがしの申すとおり、忘れずにお飲ませ申し上げ、残つたものは五日経つたら容赦なくお捨てなされ。よい薬ほど、古うなつては毒ぢやでナ。ナニ、御心配には及びませぬ。五日ののちにまたお見舞ひに参つて、新しいのとお取り替へいたしまするは。ホホホホホ。それでは、さしあつて必要なものだけを、ほんの少しばかり出ませう。エエト、この白い包みに入つたものが、頭の痛みをすつきり抑へるイタミツール。少しでも頭痛がするとおつしやつたら、時をのがさず差し上げなされ。それから、この青い包みは、眠れぬ夜をぐつすり休ませてくれるネンネンコロリ。毎晩お召しになつても差し支へはござらぬ。次に、赤い包みは精をつけるモリモリン。今の宮様には何をおいても大切なお薬ぢや。毎食後すぐに飲めば効き目がよい。マ、これだけ飲んだら腹も膨れて栄養満点。アア、ものはついでぢや、黄色の包み、下し薬のゴロピータンもあげませう」

と、能書き、講釈、お手のもの。手術、仁術、算術、話術。術数かずかず、医者徳。

あきれながらも村崎は、薬の山を押しいただき、「これはこれは、お念の入つた少しばかりのお薬。早速ためしてみませう」

と、皮肉言うても、こたへぬ算庵。

「さすがは宮様お気に入りの村崎殿。よい御了見ぢや。医者と申すは、念には念を入れて薬を処方するのが務め。これも患者第一、誠心誠意の奉仕の心ぢや。ホホホホホ。ア、それはさておき、本日のお見立て料と薬代。しめて、これこれ、これだけぢや」と、隠し持つたる算盤を、パチパチパチとはじく音。最近建てた養生所、借金返す算段は、何が何でも薬の乱売。ありがたがられて押し売りは医者ならではの腕次第。

用が済んだら、挨拶もそこそこ、そそくさ立ち出でて、

「そこの美しいお女中の方。何ぞ薬はいらぬかナ。水虫取りなら、話題の新薬、カユイノカユイノトンデーケ。十回分まとめてお買ひ上げの方に、もれなく一回分進呈中」

と、行商さながら、商人（あきうど）算庵。医者の誇りは埃にまみれ、泥に、

まみれて、帰り行く。

あと見送つて、村崎は齋の宮の御病（おんやま

ひ)、口には出せぬその子細。知れば知るほど気にかかる。そのわりなさの憂き思ひ、これも心に病あり。

そもそも斎の宮と申すは、神に仕ふる御身の上。たとへいかなる男でも、交はり持つこと許されず。さうは言うても生身のからだ。若い娘はことわりの恋を夢見る独り寝を、去年の秋の末つ方。狩りの使ひに下られし右近中将梨原成麿(なしはらのなりまろ)公とて名も高き今を時めく色をのこ。われて逢はむのやまと歌。宮も心を奪はれ給ひ、あやなく結ぶ一夜(ひとよ)の契り。それよりのちは、恋せじと櫛田の川にせし禊、神は受けずもなりけらし、大和と伊勢の山越えも恋路の関とはならざりき。さるほどに、池の氷もはやとけて、袖ひち掬(むす)ぶ夏の果て、事の次第は知らねども、ふつつり切れし音沙汰を問ふも問はれず、はかなき三月(みつき)。それが病の種となり、いつしか芽ぐみ、涙ぐみ、うち伏し給ふも道理なり。

一間(ひとま)のうちには侍女鈴鹿。斎の宮をおざなり介抱。痲症持ちの証拠には、眉間から出る金切り声。

「村崎殿。大事の宮様をほつたらかして、そこで何してゐやる。お薬をあらためませうほどに、早うちへ入らせ」

と叱りつけられ、慌てる村崎。

「ハイ、鈴鹿殿。申しわけもござりませぬ。ただいますぐに」

と、うちに入る。その間もいりもむ侍女鈴鹿。

「ホンニマア、ホンニマア、近ごろの若い者ときたら、グズグズ、グズグズと。松阪牛の歩みの方が、よつぽど速い」

と、病に毒の嫌味口。

斎の宮は気の毒と、

「マアコレ、鈴鹿。耳元でそのやうに大きな声を出してたもるな。もとより村崎に悪気のあらうはずもなし」

「お言葉ではござりまするが、悪気があらうとなからうと、過ちと申すものは根の浅いうちに断たねばなりませぬ。もとはといへば宮様が甘いことばつかりおつしやりますゆゑ、あのやうに、ろくろく仕事もせぬままに、陰口、無駄口、おしやべり三昧。私が小言を申さねば、このお館はたちませぬ」と、他人のことには厳しい鈴鹿。

村崎、じつと我慢して、

「いつもながらの若気の粗相。お許しなされて下さりませ。サ、鈴鹿殿。今日のお薬でござります」

と、両手にあまる薬ドッサリ。渡せば、鈴鹿はひったくり、ひと包みづつ確かめて、

「エエト、たしかこの白い包みのお薬がネンネンコロリ」

「イエ、それはイタミトールでござります」

「青い包みがモリモリン」

「それこそがネンネンコロリ」

「赤いのはゴロビータン」

「サア、モリモリン」

「アアモウ、さしでがましい。そなたにいちいち言はれいでもわかつてゐます」

と、覚えの悪いを棚に上げ、薬はそのまま御厨子の棚に、奥の廊下をパタパタと急ぐ足音、童女の御許。障子隔てて気ぜはしう、

「梨原成麿様の御使者、右近将監横手黒人(うこんのしやうげんよこてのくろひと)様、御出(おんい)で」といとけなりふり、言ふ声に、斎の宮は心の惑ひ、侍女村崎も気の迷ひ、うろたへ、よろほひ、顔見合はせ、我にもあらで、障子の蔭に隠れ居ることわりなけれ。

鈴鹿はひとり落ち着き払ひ、一間を出でて、迎への辞儀。

勝手知つたる他人の館。黒人、肩をいからかし、我がもの顔に大股歩き。その風貌は見るからに、色黒、髭黒、腹黒の、虎の威を借る黒狐。鈴鹿を横目でにらみつけ、上座(しやうざ)に回り、遠慮なく、どつかと腰を据ゑ、いつに変わらぬ乙声で、「何と、鈴鹿殿。久しうござる。が、お手前一人で御出迎へか。気の利いたことで、いたみ入ります。本日ここに参つたは横手黒人にて、黒人にあらず。すなはち、我こそは右近中将梨原成麿様の御名代なれば、その御心であられよ」

と、権威を見せて言ひければ、

「お立場、承知つかまつりました。ただいま斎の宮大伯皇女、御不例によつて御殿籠(おんのごも)りたれば、お使ひの子細はこの鈴鹿が承りまする」
「ムウ、我も名代、お手前も名代。さすれば、ただいまより申し上げることは、中将様が斎の宮様に直々にお話しなされるも同然。ようお聞きなされませ。『右近中将梨原成麿、伊勢の斎宮(さいぐう)大伯皇女に忍び通ひ奉ることたび重なれども、子細あつて今後一切お目にかからぬこと御承知おかれよ』。ナニ、鈴鹿殿。お言づてはこればかり」と、唐突無情のひとことを聞いて一間の二人はびつくり。

我か人かの斎の宮、

「そのわけ聞かう」

と、駆け出でんとし給ふところを、立ちはだかつて、村崎は、

「宮様、お待ち下さりませ。あなた様は齋の宮。あのやうな下衆者に、直々にお会ひなされてはなりません。ここはひとまづ私に」

と、有無を言はせぬ侍女の本領。

村崎、さつと向き直り、襟元直して気を引き締め、黒人の前につかつかと詰め寄り、

「将監殿、ただいまの仰せ、中将様の御本心とも存ぜませぬ。なんぞの間違ひ、冗談か、ただしは偽り」と言ふを鈴鹿はさへぎつて、

「村崎殿、御無礼でござりませう。ろくに御挨拶もなされず、いきなり目の前に飛び出して、それだにあるに、将監殿の言はるることをでたらめとは何事」

「オウサ。我が言葉は我が言葉にあらず。中将様の仰せなれば、それがしを侮るは、中将様を辱むるも同然」

とねめつけられて村崎は、その場に居直り、両手をつき、

「無礼は無礼としておわび申し上げます。さりながら、さきほどのお言葉、どうでも中将様の仰せとは聞こえませぬ。重ねてお尋ね、いかに、いかに」と問ひただせば、将監黒人悠然と、

「イヤ、仮にも宮城の警護に与（あづか）る右近将監横手黒人、滅多に偽り申しませぬ。中将様の仰せのままにお伝へせしこと、天地神明に誓うて相違なし。それが証拠に、この三月（みつき）といふもの、中将殿の伊賀越えがただの一度もござつたか」

と、鋭き言葉にハツとして、

「それは、それは」

とたぢろぐ村崎。平気の鈴鹿。

「将監殿のおつしやる通り、さやう、もう百日になりませうか。これほど御足が遠退いては、いかに気長き宮様とて、諦め給ふが最上策」

「ムハハハハハ。さすがは上臈鈴鹿殿。よう話が通じます。そんなら、宮様の御名代。得心していただけましたナ」

「得心、得心。サ、サ、将監殿。山越えの長旅と大事のお役目。さぞお疲れでござりませう。ごゆつくり休息なされませ。コレ、御許（おもと）。奥の間に酒（ささ）の御用意」

と、あつといふまに運ぶ段取り。

「しばらく、しばらくお待ち下さりませ。中将様の

お見限りは、ようわかりました。が、それにはそれなりのわけがござりませう。それ聞くまでは得心参りませぬ」

「村崎殿。往生際が悪からう」

「アア、さな言はれそ、鈴鹿殿。村崎殿のお立場なれば、わけが知りたいとは御尤も。大事な、お話し申さう。中将様におかせられては、いつぞやの狩の御使ひの折り、齋の宮と密かに通じ給ひ、そののちもたびたびの伊勢下向。さりながら齋の宮の密通は、神を欺き、帝を裏切る仕業。朝廷の知ろしめすところとならば、宮は解職、幽閉。中将様とて御身の大事。幸ひに、と申しては語弊がござるが、天武の帝の御病ひ篤くなり給ひてよりこのかた、世上の耳一点に集まり、当国まで警戒の目は届かず、これまでのご無事。さる間、三月ほど前ごろより、燃ゆる思ひは見えねども、噂の煙立ちのぼり、思はぬ難儀。人の噂も七十五日と、謹慎なされてゐられしが、帝崩御の悲しみさめやらぬうちに、齋の宮の御身辺より不穩の動き発覚。ここに至つて中将様も、神に触りし崇りかや、もはや深入りしては身の破滅疑ひなし、とお察しあつて」

「アアイヤ、しばらく。宮様の身辺に何とかおつしやつたが、それはいつたい」

「なんぢや、ご存じないか。さすが伊勢は厳しい山越えの国。噂さへもが伊賀のお山を越えわづらふと見えます。齋の宮の御身辺とは、弟君、大津皇子の御こと」

と、話の筋道、岐（わか）れ道。村崎、皆目見当つかず、

「大津様、大津皇子様の御身の上に、何ぞ災ひがござつたか」

「されば、されば。知らるる通り、大津皇子は天武先帝の御子とは申しながら、御母大田皇女（おほたのひめみこ）は早うみまかり給ひて、御後見（うしろみ）のおはしまさぬ身の上。かたや、日並皇子とあがめられ、世の信望を一身に集め給ふ草壁皇子は、父御（ててご）こそ同じ帝なれども、御母鷗野讚良皇女（うののさららのひめみこ）は先帝最愛の後の宮。今なほ御健在にて、草壁皇子を慈しみ給ひ、御後見なのめならず。大津皇子は、この境涯の隔たりを逆恨みに妬み給ひ、いかで日嗣（ひつぎ）の御位（みくらる）を我がものにせむと、草壁皇子御一家中を呪咀したてまつり給ひしぞよ。さりながら、悪事千里を行く、と、三日をあげず露見したれば、もはやのがれぬ死罪獄門」

と聞いてびつくり青村崎。

「コハー大事」

と、一間のうちに駆け入れれば、齋の宮も動転の焦る心に身をもがき、

「コレノウ、村崎。今の話は真実か。弟大津は心素直な律義者。地位や名誉に恋々とせず、臣籍に下つて、蔭からなりとまつりごとを補佐せむと、幼い頃から学問、武芸に打ち込みし大和魂。この自慢の弟が草壁殿に謀叛など起こさうか」

と、涙ながらのくどき言。

村崎同じく齒がみをなし、

「さやうでござりますとも。したたかな鷗野の後のおほしめしにて、草壁様が日嗣の御位におはしませども、世評はむしろ大津皇子様。大臣公卿の中にも、心ある者は大津様の御即位を待ち望むとも聞きます。ア、さては大津様の御評判のあまりにすぐれたるを悪しう思うた草壁様御家中の忠義づらが、大津様を陥れたてまつつたナ。エエ、逆恨みとは、どつちの仕業」

と、口惜しまぎれの言ひたい放題。

齋の宮はたしなめ給ひ、

「滅多なことを言ふではない。そのやうな些細な愚痴が表にあらはれ、讒言と化して世を乱すもの」

「それでも宮様」

「エエ、言うても埒のあかぬこと。そんなことより大津の身の上。せめて命だけなりとも助かる術はないものか。身動き叶はぬこの姉に、よい思案などあらばこそ。口惜（くちを）しいことながら、蛇の道は蛇。殺す道を知るならば、生かす道をも知つてゐやう。ここは一番、我を折つて、将監に尋ねてみてはくれませぬか」

「それは何よりお易いことながら、宮様が将監殿に借りを作らるるのは、よからぬことかと存じます」

「とは、なぜに」

「お気づきではござりませぬか。将監殿は中将様のお供の身でありながら、恐れ多くも宮様に横恋慕。そのやうな不屈き者にお頼りなされるは、御身の災ひ、心の毒」

「サア、その災ひを福となし、毒を薬と変ずるが、お前の分別、器量ぢやないか」

「それはさうでもござりませうが」

と、ためらふ村崎。宮は落胆。

「やつぱり無理か」

と、うなだれて、思案の村崎もろともに、押し黙りてぞゐたりける。

表の間には黒人、鈴鹿。額寄せつつ、悪だくみ。

「ノウ、鈴鹿殿。かねがね思うてをりましたが、お手前のやうな美しいお局様が、このやうに、なにやら神さびた気味の悪いところには不似合ひといふもの。そろそろ都に帰りたいとは思し召されぬか」

「それはもう。何の因果でこのやうに陰気なところで、陰気なお方のお世話の日々。リクナビNEXTばかり見てをります」

「御尤も、御尤も。あの陰気の宮、ではない、齋の宮のお世話など、村崎殿一人で十分。実はナ、お手前に耳寄りな話をござるのでや。右大臣大伴卿のお屋敷では、裳着（もぎ）を間近に控へたいと姫の御ために、才知豊かなみめうるはしい女房をさがしてをられます。大伴卿が右大将を兼ねてゐらる縁で、心当たりがあれば教へてくれよ、と、みどもに内々のお尋ね。そこで早速お手前のことを思ひ出し、お薦め申したところ、何が何でも連れて参れと、大喜びをなされてノウ」

と、嘘かまことか、巧言利口。鈴鹿嬉しく、にじり寄り、

「そんなら都で暮らせますのか。アア、嬉しや、将監殿。そなたは私の大恩人。ありがたやありがたや。ア、それでも夜逃げするわけにも参らぬし、この館を離るるにもそれなりの言ひ訳が要りませう」

「そこは、ソレ。謀叛人の姉君にお仕へするのは御免ぢや、とでも言うて。ナニ、気遣ひなされるな。右大臣殿が後ろ楯」

「なるほど、なるほど。モ、ますますの大恩人。何ぞお礼がしたいが、将監殿、お望みはござりませぬか」

と、言へば黒人したり顔。一間の襖はつかに開（あ）けて、様子うかがふ村崎に気づかず、厚顔鉄面皮。

「何、望みとナ。さらばひとつ所望いたす」

「オオ、何なりと」

「ム、さらば齋の宮のお部屋に今宵のお手引き、頼みます」

「宮のお部屋に」

「アア声が高い。この望み、思ひつきで申すのではない。この如月の望（もち）の頃、中将様のお供の翌朝、そろそろお帰りの時刻かと、御寝所近くに参つたところ、春の嵐に煽られて、簾がサツと舞ひ上がった。折りしも端近に出てをられた宮様のお姿、思ひがけず目に入つて、恋の炎が燃えさかつた。機会あらば、と思うてゐたところにちやうどこの仕儀。サ、これだけのことを言うたからには、嫌とは言はせぬ。鈴鹿殿」

と、念の入つたるたくらみに、鈴鹿ちつとも驚かず、
「ソリヤ面白い。気位高い齋の宮。お仕へしながら、
どうにも好きにはなれませなんだ。あの高貴な宮
様と、この下衆な将監が、イヤ、ホホホ、そんな
ら早速奥の間で、酒（ささ）召しながら」
「思案せう」
と、類が友呼ぶ呼子鳥、もろとも

奥へ入りにけり。
あとに村崎立ち出でて、なほも思案のひとひねり。
思ひついたることやある、俄かに色めき、うちう
なづき、
「宮様、宮様」
と呼び奉り、一間に戻れば、齋の宮はしほしほと、
消え入るやうな涙声。
「私はもう何の望みも失せました。天武皇女とい
ふ身に生まれ齋の宮に卜定されて、恋には縁の薄
き日々。やうやう得たる忍びの恋も、所詮叶はぬ
宿世の夢。あまつさへ悲しきは、我が最愛の弟の、
謀叛の科（とが）にて死罪とは、あんまり非道な
情なや。生きて死ぬるは我が身のこと。こりや仏
罰か、没義道な」
と、神に仕へる身の因果。今さら嘆くも不憫なり。
村崎、そつと力をつけて、
「お嘆きなさるはごもつとも。さりながら、宿世の
門は叩かねば開きませぬ。その工夫をいたませ
う」
「工夫、とは、どのやうな」
「中将様の御ことは、お諦め願ふとしても、大津様
のお命は何としてもお助け申ませう」
「されば、よい知恵が浮かんだか」
「よいかどうかはわかりませぬが、やつぱり将監殿
を頼ませう」
「それでも将監には下心がある、と」
「サア、その下心を逆手に取って、しゃべらせるの
が思案、工夫」
「それはさうでも、男の腕力侮れぬ。そなたひとり
で大事ないか」
「なるほど腕は強うても早合点のお調子者。ちょっ
とお耳を」
と、内証の話のあとに村崎は、御厨子の棚をうち
さぐり、宮に黙礼、一間を出で、手つきあやしう
茶の用意。調べ果てて、奥の間に、
「将監殿、黒人様。ちよつとお話がござります。こ
ちへ、こちへ」
と、呼ばはれば、将監ぬつと立ち出でて、あとに

ひつ添ふ鈴鹿局。
「おもてなしの最中に中将様の大事のお使者を呼び
つくとは無作法千万」
と、睨みつくれば、将監は、
「さな言はれそ、鈴鹿殿。サ、村崎殿。ご用件承らう」
と、こちらは余裕の分別面。村崎、ことさら慇懃に、
「御心広いおぼしめし。ありがたう存じます。た
だいまお茶を点れましたゆゑ、まづは御一服。鈴
鹿殿もお相伴召されぬか」
と、さりげなう、二人（ににん）が前に差し出す
湯呑み、勧め上手に勧められ、将監、鈴鹿は手に
取つて、ちよつと苦めを飲み干して、
「この茶はどうやらめづらしい味」
「さういへば、いつもの薄茶と香りも違ふ」
「そのはず。今日仕入れたばつかりの当地処方の新
銘茶」
と、ことば巧みにごまかさされ、風流に疎き将監は、
鼻を鳴らして、
「フン、言はれてみれば、それなりに飲める味。シテ、
お話とはどのやうな」
と問へば村崎両手をつき、
「さきほどのお話では、大津皇子様はご謀叛の御心
とやら承りました。我ら到底真実とは存せませぬ。
が、よしんばそれがまことでも、齋の宮様は言葉
の限りを尽してお諫めあそばす御心なれば、まづ
もつて大津様のお命をお助け申し上げたう存じま
す。将監殿は聡明で温厚なる上に、事の成り行き
を誰よりもようご存じ。おすがりするのも恥かし
ながら、何ぞ手立てはないものか、謹んでお尋ね
申し上げます」
と、懇切しきりの願ひにも、
「大それたことを。みどものやうな下役人にソリヤ
難題と申すもの」
と、にべも愛想もあらをのこの、胸の奥底、見透して、
「サア、そこが談合。こちらの願ひをお引き受け
ただけるなら、そちら様のお望みもまんざら聞か
ぬではござりませぬ」
と、思はせぶりの流し目に、黒人、俄かに顔色改め、
「ホホウ、みどもの望みを叶へてやらう、とおつし
やるか」
「御意」
「どのやうな望みも、かな」
「どのやうなお望みも」
「齋の宮のお気に召さぬことでも、かな」
「お気に召さうが、召すまいが」
と、畏にはまつたそぶりの村崎。含み笑ひの将監は、

言質取つたが身の要害。

「出来た、出来た、出来た。鈴鹿殿、お手前が確かな証人。しかとお聞きなされたナ」

「いかにも、御安心なされませ」

「ムハハハハハ。飛んで火に入る何とやら。お約束違はれナ」

と、念のごり押し。村崎も、

「命にかへて」

と、請け合うたり。

「しからばお話し申さう。大津皇子の御処刑は、大臣公卿の朝議において、厳密なる御審議の上に定まりしことなれば、この期に及んで無実無罪を訴へられても詮ないこと。また、窮鼠猫を噛むと警戒厳しき折りから、助命嘆願なされてもお許しはござるまい。さうなれば、道はただひとつ。実を申せば、大津皇子は危機を察して逐電召されたものと見え、そのお行方はいまだに不明。このままいたづらに時が経たば、兵を集めて反乱の恐れあり。さるによつて、『何人（なんびと）も、大津皇子の御姿見つけ次第、首討ち奉つて持参すべし。その身、手足は烏の餌食。御首ひとつが褒美の証拠』と上意下達。ここぞござる。ここが却つてこちらの方策。すなはち、胸のほくろも手足の傷も、身の丈さへも沙汰のほか。ただただ面様（おもやう）相似たる若者を身代はりに立て、その首持参なされるれば、お命ばかりは助かりませう」

「身代はり、とナ。言ふは易うて無理難題。大津皇子様の、あの気品に満ちたうるはしいお顔に似た者など、どこに二人とござりませう。たとへ似た者ござつても、いづれお歴々の御実検のあるはず」
「イヤ、その心配御無用。生き顔と死に顔は似て非なるものと世のことわざ。また、死に顔は仏の顔とも申して、おのづから品高く見ゆるもの。ナニ、首実検と申しても形ばかり。このたびの御処置は、お歴々みづからがうしろめたう思うてをらるることなれば、さほどの穿鑿ござりませぬ。古手なれども、結句身代はりが唯一無二の方法」

と答への裏には醜き心。

「サ、こちらはお望み通りにお話しした。村崎殿にもお願い申さう」

「ハ、ハイ。これはうつかりいたしました。で、将監殿のお望みとは」

「へへ、御推察なさつてゐるであらうがナ」

「ハテ、五位の位をお望みで宮様のお口添へが要りますか。左近衛に遷りたいとのお望みか。ただしはやっぱり金子（きんす）か」

と、のらりくらの時間かせぎ。

将監、気がせき、声高に、

「ヤア、村崎殿。今さら何をしらじらしい。そんならきつぱり申し上げやう。斎の宮のお部屋に、みどもをお導き下されよ」

「宮様のお部屋に。ソリヤまた、何をなされうと」

「何。男が女子（をなご）の部屋に入つたら、することはたつたひとつであらうがな」

と、舌なめずりしてねつとりと言へば、村崎わざとらしく、

「ヒエエ、あんまりな」

「言ふな、言ふな。宮様のお気に召さぬ望みでも叶へてやらうとさつきの言葉。コ、コ、この鈴鹿殿が証人ぢや」

と、目くばせ、合図に、図に乗つて、

「仰せの通り。私とて宮様のお側仕への身の上なれば、さやうなことを望むでないが、契約は契約。それを違へては、却つて宮様のご名誉にかかはりませう。サア、村崎殿」

「サア」

「サア、サア、サア」

「サアテ」

と、追ひつめられて、村崎は胸のうちに指折り数へ、

「そろそろ効いてもよささうなものを。アア、気が気でない」

と、言ふ声さへも息の下。

鈴鹿は息まき、

「いつまでグズグズひとりごと。待つばかりでは埒が開かぬ。そなたがお連れせぬならば、私が参る」と立ち上がれば、

「望むところ」

と、将監もづかづかづかと傍若無人。

「しばしの猶予」

と、取り纏る村崎の息の根止め、灯り吹き消し真つ暗闇。斎の宮も逃げ場なく、押さへつけられ絶体絶命。あはれ非道の餌食かや。

物音しばし闇のうち、しじま破つて、将監の奇妙に歪んだ嗚（しやが）れ声。

「ア、アレ、アア、アレレ。ド、ドド、どうしたこつちや。ハ、腹が、腹が」

と呻けば、呻く侍女鈴鹿。

「アリヤ、コリヤどうぢや、キリキリ、なんでこのやうに、グルグル、ア、アア、をかしい、をかしい。今日はなんにも、ゴロゴロ、悪いものを食べた覚えは、アイタタタ覚えはなんにもないものを」

「オ、お手前と、ミ、みどもが、ツツツ、同じやうに口にした、イテテテ、悪いものもが、アタタ、あつたとすれば、この村崎めが点れた茶の一杯」
 「トトト、とすると、さては、アイタタタ、今日、算庵殿の下された、アツツツ、黄色の包みのゴロピータン」
 「ナ、なんぢや、下し薬か。トトト、当世はやりの藪医者め。ホホ、抛（はふ）つておいても治る病に、ヤヤ、山ほど薬出しをつて」
 「おかげで、テテテテ、こつちは、アアア、えらい迷惑」
 「モモ、もうチョイといふ、トト、ところまで来たものを、クク、口惜しい、残り多い、イタタタタ。今日の仕事は、ア、諦めて、テテテテ。わしや、厠へ行つて来る」
 「イ、イヤ、ワ、私が先に」
 「わしが先」
 と、互ひを突き分け、はねのけて、表の間より奥廊下。腹を押さへて行くあては、厠、厠と、情けなや。
 村崎やうやう立ち上がり、灯りともして、御厨子棚。かねて処方気つけの薬。
 齋の宮は息吹き返し、
 「オオ、村崎。私は助かりましたのか。あの悪人どもはどうしやつた」
 「ハイ、下し薬に耐へかねて、見るにも堪へぬ恥さらし。先争うて厠へ走り、もう、戻つては参りませぬ」
 と、吐き出すやうに言ひければ、宮は安堵に胸なで給ひ、
 「いつもながらのそなたの機転。よう助けてくれました」
 と、手をつき給へば、村崎は、
 「アノ、宮様のもつたいない」
 と、両手差し伸べ、押しただけは、宮は花咲くほほ笑みを浮かべ給へど、御心にかかるは弟宮のこと。
 「ノウ、村崎。さいぜんの将監の話によれば、身代はり立つれば、大津の命、助かることもあらうといふ。そなたは何と思うたノ」
 「ハイ、悪党面（づら）の言ふことなれど、道理は道理。やつぱり身代はりこそが、たつたひとつの命の道」
 「それでも、大津は行方知れず。たとへ知れても誰を身代はり」
 と、言葉少なに見かはす主従。

思ふ人、天降（あまくだ）りこむものならなくに、夜寒の空をつれづれと見上げて、もらすため息は、
 「大津」
 「皇子様」
 と、呼べども、呼べども、天翔（あまがけ）るはずもあらずの嘆きなり。

惜しめども返らぬものは少年の春ばかりかは、この秋も明日は長月つごもりの夜（よ）はしんしんと吹く風に、またも降りくる涙雨。庭の前栽（せざい）をかきわけて、血筋の縄の断ちがたく、旅装束もなほざりの若き男のとほとほと、足も絶え絶え、息絶え絶え、縁の階下に倒れ込み、
 「齋の宮、物申す」
 と、かそけき声を聞きとがめ、村崎、そつと一間を出で、あたり見回し、
 「誰ぞおいでなされたか。そこにゐやるはどなたぞ」と問へば、さやけき玉の声。
 「村崎、か」
 「そのお声は、そのお姿は。もしや、あなたは大津皇子様」
 「いかにも大津。姉上様に御意得たい」と聞いてびつくり。
 「宮様、お出ましくござりませ。大津皇子様のお越しでござります。早う、早う」
 と、いざなはれ、見出し給へば弟君。
 「コハ奇跡か天恵か」
 と、駆け出で、駆け寄り、抱き起し、手を取り給へば、大津皇子、うちうなづいて目と目を合はせ、心はずでに通ひけり。
 齋の宮は気を取り直し、
 「夜露は身の毒。まづまづうちへ。村崎、手を貸しや」と手早き指図。
 村崎、早速に近寄つて、齋の宮と右、左。大津皇子の身を支へ、表の間にぞ上りける。
 気賢（きざと）き村崎、茶の用意。一杯目はぬるい湯で、二杯目は熱めに調へ、困憊し給ふ大津皇子に奉れば、
 「オオ、かたじけない。二日二晩、食らふものとは、枯れ始めの草や木の実。飲むものとは、夜露、雨水。亡き父帝にも、姉上様にも、顔向けならぬ面目なさ。かかる姿におちぶれながら、時もところも憚らず、かうして参つたそのわけは」
 と、語り出だすをさへぎつて、
 「わけはゆつくり聞きませう。村崎、お菓子」
 と仰せつければ甘い菓子、ほろ苦き茶に差し添へ

て、あとは遠慮に座を下がる。

大津皇子は遠慮なく、

「なるほど、菓子はいただきます。さりながら、話をあとにはできません。お聞きなされて下さりませ」

と、なりふり構はぬ心急（こころぜ）き。

右手で菓子を頬ばつて、左手で茶を流し込み、ものを言ふのも食らふのも、ひとつ口とはわりなしや。

「かやうに突然参りましたのは、お暇（いとま）申し上げんため。二十四年といふ間、姉上様の深いお慈しみによつて、この大津、思ふままに学び、願ふままに働くことができました。が、これが今生のお別れ。再びお目にはかかりませぬ」

と言へどもちつとも驚かぬ姉の素振りに不審の大津。斎の宮は重き口。やうやう開いて、

「そなた、暇を言うてどこへおいでなされます。何ゆゑ会はぬとおつしやります」

と、問はれて大津ひと息つき、

「父皇は崩御なり、次の帝はいまだ定まらず。民の心を安んずるためにも、草壁皇子、早々に御即位あらば、我ら微力をもつて後見（うしろみ）申さむと存ぜしに、何、血迷うたか、台閣の諸卿に我を皇位につけむとの動きあり。さりながら、草壁殿はかねてより日並皇子とて万機を委ねられ給ひし皇太子。あまつさへ、母こそ違へ、草壁殿は現在の兄。この御方をさしおいて、大津ごときが御位にあつてよいものか。噂の音があがるたびに、身を慎しみてゐたりしが、二十四日の昼つ方、新羅僧行心と名乗る占術師の極秘の訪問。目通りすれば、我が顔を矯（た）めつすがめつ、そのあげく、『皇子様の骨相は、臣下に終はらせ給ふものにあらず。天智、天武の聖代をお継ぎなさるは大津様。草壁様が帝となれば、国は衰へ、世は末世。我に手立ての覚えもあれば、早速御謀叛なされませ』と、奥底知れぬそそのかし。もとより大津にそのやうな野望なければ、その場かぎり、『承つた』と、なま返事。あとは新羅の書物、工芸。雑談（ざふだん）にまぎらかし、引き取らせたるその夕べ。忍び歩きの町中で、『大津様は今宵のうちに挙兵なさる』『草壁様や鷗野皇后（うののきさい）を暗殺して、明日にもご即位あるとやら』と、人の噂に仰天、合点。誰の指図かは知らねども、謀られしこと疑ひなし。『承つた』のひとつが、うかつであつたと後悔も、かうまで噂広まつたれば、もはや言ひ訳立つべくもなし。有間皇子（ありまのみこ）の

先例に照らせば、死罪も免れず。かくなる上は潔う最期を遂げむと思へども、心残りはただひとつ。はらから恩愛、姉上にお目にかからずわけも言はず腹切ることのむつかしさ。どうで屋敷の周りには役人どもが待ち伏せすらむ、と、着の身着のまま、その足で、伊賀の裏道、山越えを迷ひ迷ひてたどり来し」

と、一気に語る無念の思ひ。

あまり非道の中傷、陰謀。斎の宮は情けなう、「法と無法は紙一重。百姓（ひやくせい）の心を安んずとは建前に過ぎず、心を尽くすは己（おの）が立身。まつりごととはこのやうにむごいものか」と思ひ知り、恨み嘆きの忍び泣き。

「幼いころよりたつた二人のはらからと、男女（をとこをむな）の隔てもなく泣くも笑ふもひとつ心。覚えてゐるやるか、私が七つ、そなたが五つの夏のこと。手慰みの鞠ひとつ、ころりころりと手がそれて、庭のお池に浮かびしとき、『私が取つてあげませう』と、そなたが言へば『危ないことはこの姉が』と二人ながらに池に入り、掬ひし水の心地よく、時を忘れて水遊び。あとで乳母（めのと）にきつう叱られましたナァ。ソレソレ、乳母といへば、そなたが乳を飲んでゐると、うらやまうて『まろも飲みたい』とわがまま言うて、かたへの乳を無理にさぐつたこともありました。ホホ」

「ハハ」

「ホホ」

「ハハ」

「ホホホホホ」

「ハハハハハ」

と笑うても、笑うても別れのときは迫り来て、その悲しみはひたひたと胸突きあげて消えやらず。

しばしの沈黙、口火は大津。

「姉上様。おかげさまで、胸のつかへも下りました。大津は、姉上様の弟に生まれたことを誇りに思うてをりまする」

「私こそ、そなたのような聡（さと）くやさしき弟を持つたと思へば、今はもう思ひ残すことはありませぬ」

といふ言葉尻いぶかしく、

「コレコレ姉上。罪を受けしはこの大津。姉上様が『思ひ残す』とは筋の違うたお言葉」

「イヤ、鷗野皇后、草壁皇子を呪詛し奉りし罪によつて、首討たるはこの大伯」

と、思ひもよらぬ言の葉に、様子うかがふ村崎は斎の宮の心を察し、これも覚悟の面持ちは主（しう）

に劣らず、異ならず。

合点いかぬは大津皇子。

「さきほどより繰り返し心得がたき御仰せ。そもそも大津は呪詛のことなどひとつも申してはをりませぬ。ご推察か、ただしは疾（と）うよりご存じなりしか。承らむ」

と詰め寄れば、齋の宮はうち笑み給ひ、

「そなたと私の間には隠し隔ては無用のこと。そなたの非業を知つたる所以、今日一日の私の嘆き、聞いてくだされ、弟」

と、梨原中将のつれなき仕打ち、将監黒人のわりなき悪行、それに加へて侍女鈴鹿、欲にくらみし不忠さへ重なる悪夢の数々は夢にはあらで鬱々と、秋の名残の虫の声、かそけき音に響き合ふ。

「富と名誉に魂売つて、愛と誠がないならば、人は人かは、人ならず。ましていとしい弟を無実の罪に陥れ、甘い汁吸ふ奴（やつ）ばらを、神や仏は見逃し給ふか。その情けなさ悲しさをいつか晴らさむ。そのために、こたびの罪は私が引き受け、そなたは東（あづま）か南海になりをひそめて身を隠し、時節来たらば都に戻り、日本秋津洲の栄えのために、力を尽くしてくださいよ」

と訴へ給へば、

「さやうのことがござりましたか。将監黒人はともかく、梨原中将はまだしも気骨稜々たる男と存じてをりましたが、『寄らば大樹』とは残念至極。ご心痛お察しいたします」

「そんならわかつてくりやつたか」

「イイヤ、敵（かたき）にとつて目障りなるはこの大津ただ一人。姉上様が罪をお引き受けなされても、一時しのぎの気慰み。またも、あらぬ罪をこしらへて、結句大津を日本国中捜し求め、やつぱり首を討ちませう」

「さればこそ、罪を受くるは大伯にて大伯にあらず。私とそなたが入れ替はり、大津皇子とて都に入り、身代はりに討たれるのぢやわいなア」

「何を無謀な。敵もさるもの。そのやうな子供騙しが通るはずは」

「イエイエ、将監の話によれば、詮議さるるは首ばかり。面立ちの似た者ならば、偽ることもできるといふ。幸ひそなたと私とは幼いころから瓜二つ。腕の太さや背の高さ、男と女の違ひなど、異なるところは首から下のものばかり。死ぬればきつと髭も伸びぬ、声も出さぬ。身代はりになるは、姉よりほかにはありますまい」

と、気負ひ込んだる説得に、大津はたじろぎ、ササ、

されども姉上様お一人を死なせて、この大津がどうして生きてゐられませう」

「わからぬお人ぢや。私が死んで、そなたが生き残るのではありませぬ。二人は今日より一心同体。二人に巢食ふ悪しき宿世を私があこの世に持つて行き、そなたは二人の良きものをこの世で生かす。このままそなたが討たれたら、あとに残つたこの姉こそ何の頼みもありませぬ。死ぬるも悲し、生きるも苦し。二人で死んで、二人して生き抜きませう」

「それでも姉上」

「なりませぬ」

「姉上」

「ならぬ、どうでもならぬ、ならぬぞよ」

「姉上様」

と、とりつき嘆けば、姉宮もいとせきがたく泣きゐたる。

気を取り直して大津皇子。

「かくなるうへは姉上様のおつしやるとほりにいたしませう。が、今ひとつ困つたことがござります。私の身代はりに姉上様が上洛なされたら、この齋宮はいかがなされます。齋の宮は行方知れず、と濟ませて通るものでもなし」

と、四面楚歌でも冴えわたる、さすが大津の最後の理詰め。

「画竜点睛を欠くとはこのこと。今にも新帝御即位といふこの時節。御代がはりには齋の宮も改まるのが御定め。イヤ、それどころか、中将殿との不義も表沙汰となったからには、今日明日にも職を解くとの御使者もこそ。ムウ、オオ、そんならかうしませう。そなたの罪を耳にして、詫ぶる思ひで自害した、と噂を流し」

「アアイヤ、それではやがて露（あらは）れます。齋の宮、御生害あそばされし、との使者を出さば、折りも折りゆゑ、『検死あるによつて、亡き骸はしばしとどめおけ』との御指示がござりませう。それに逆らば、また詮索の手が伸びて参ります。さればというて、使者を出さねば怪しまれ、これも身代はりとても、さうさう都合よう見つかるはずもござりますまい」

と、自縄自縛のいらだたしさ。思ひあぐねて齋の宮、大津皇子も歯噛み、足摺りしているところへ、一間の内よりきつぱりと、

「そのお役目は私が」

間髪入れず、「ぐつ」と身を刺す鈍き音。「ムウウウ」と地を這ふうめき声。顔見合はせて齋の宮、

戸惑ふ大津に力をつけて、
「早う様子をうかがうて、今すぐここに」
とせきたつれば、我に返つて大津皇子、うちうなづいておつ立ち上がり、駆け込み飛び込み一間のうちに伏したる女房抱き上げ、表の間にぞ連れ来たる。

斎の宮もみざり寄り、
「そなたはよもや」
と、紙燭かざせば、あかねさす村崎、あたかも断末魔。姉、弟は気も動転。もだゆる侍女の手を取つて、
「ノウ、村崎。なにゆゑにそなたまでが先腹するぞ」
「オオサ、今ここで、あだに死ぬるが手柄か、ヤイ」
と嘆かせ給へば、村崎は息の下から、
「ムウウウ・・・、フウウウ・・・。宮様方。この村崎は木にあらず、石にもあらず。情けも分別も持つたる人の子。さいぜん宮様は、『二人の良きものをこの世で生かす』とおつしやりましたナア。私も、宮様にお仕へすること、はや十二年。恐れながら、宮様とは心はひとつと思つてをります。私と宮様がひとつ心で、宮様と大津様がひとつ心なら、三人揃うてもやつぱり心はひとつ。お二人ではなく、三人の良きものをこの世で生かす、とおつしやつて下さりませ。死ぬるも悲し、生きるも苦し。三人で死んで、三人して生き抜きませう」
と、苦悶の訴へ。

「シテ、シテ、その手立ては」
「さればこそ、宮様は大津様の身代はりとして上洛の上、敵（かたき）の手にかかれ給ふ。大津様はしばしの間、お姿隠し、しかるべき日にお備へなさる。そして私は宮様のお召しものを頂戴して、ここでかうして自害の体。下女どもは宮様のお顔を存じませぬゆゑ、誰も疑ふ者はござりませぬ。幸ひ、宮様と私は年配（としばい）といひ、背格好と申し、寸分違はぬ双子同然。都から検死の役人来たるとも、証拠となるべき気高さは見分くるべくもあらざれば、これにて磐石。また、この村崎の行方としては、鈴鹿殿の逐電に伴うて、同じう宮様をお見捨て申した、と噂を立つれば磐々石」
と、声と音とをなひまぜの筋道通ることわりに、斎の宮は胸ゆるがせ、
「もうよい、もの言やるな。無理しやるな。そなたの深き情けのほど、たとへ邪剣にかかつて、けつして忘れはしませぬぞ。大津、よいな、合点か」
「申すまでもござりませぬ。コレ村崎、そなたの言ふとほり、姉上様とこの大津とそなたと三人、ひ

とつになつて、生きてゆかうぞ」

「大津様」

「村崎」

「宮様」

「村崎」

と、もろ声あげて三人は、しぐれしぐれて、遣水に、あふるる玉か涙川、櫛田の川と五十鈴川集めて流すごとくなり。

斎の宮は涙を拭ひ、
「私が自害の証拠として、惜別無念の形見の歌、ひとつ残しておきませう。『我が背子を都へやるとき夜更けて暁（あかとき）露に我が立ち濡れし』」
と、詠みつつ、手づから書きとめ給へば、大津皇子の御返し。

「今度は私が姉上様を都に送る別れの一首。『二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ』お気をつけて」

と、やさしき御情。

「時こそ移れ」

と斎の宮。出家するにはあらねども、心は仏の剃髪と、かねて用意の髪切り鋏。あたは緑の黒髪を削ぎ給ふほどの潔さ。

見入る手負ひは気の毒の、大津は無念のわび涙、斎の宮も覚悟の涙。また三人の袖屏風、乾くもなき沖の石。

秋の名残の長き夜の無明長夜の世の中に、誠尽せし一筋の心はあだと奈良路行く。まだ明けやらぬ暁に、置く白露の玉の緒の、絶えなば絶えね。絶ゆるとも、その輝きの真実をあとにとどめて、伝へけり。(了)

注

- 1) 雨野士郎作『茨田池物語』。この作品は『まんだが池物語』として山田庄一補綴、鶴澤清介作曲で1995年に国立文楽劇場で上演されている。
- 2) 『万葉集』巻二・165,166
- 3) 『伊勢物語』第六十九段